



木曾企第120号
平成20年10月20日

国土交通省道路局長 殿

木曾町長 田中勝巳



今後の道路行政についての意見・提案について（提出）

平成20年9月19日付国道企第37号にて依頼の表記については、別紙のとおり提出します。

今後の道路行政についての意見・提案

①道路行政全般について改善すべき点・要望や提案など

長野県 木曽町

国・地方財政の急速な悪化により、道路等の社会資本整備に必要な資金の確保が困難となるとともに、国民生活も所得の低下や経済見通しの不透明化などで国民全体に将来に対する不安感があるなかで、「道路特定財源に関する基本方針」に沿った中期計画の策定は重要である。

今後新規路線の整備については需要予測等十分な検討による選択と集中により、国民生活に密着した道路や産業の育成に重要な意味をもつ道路の整備を優先して進めるべきである。

また、橋梁等の道路ストックは老朽化しているものや耐震強度の十分でないものも多く、ストック改良事業も重要な事業である。

木曽地域の例では、平成18年に開通した伊那木曽連絡道路により地域間の流通や交流が一変し、大きな変化と効果を挙げていることは周知の事実であり、このような意味を持つ地域間連絡高規格道路の、十分な需要予測等検討の上での建設は地域の活性化に大きな意味を持つ。

さらに、木曽地域を南北に貫く国道19号は首都圏や北陸東北地方と東海近畿地方を結ぶ重要な路線であり、トラック等大型車を中心に一日2万台もの交通量がある大動脈であるにもかかわらず、これまで十分な改良や冗長化が進んでいなかった。長野県が主体となって木曽川右岸道路の整備を進めているが、財源の問題から十分な進捗は望めない状況となっており、現在直轄事業として着手されている棧バイパスや桜沢バイパスが整備された後には、ボトルネックとなっている七笑橋等の重点地点における改良・複線化により、災害時や緊急時等の地域住民の生活交通確保を進めることが重要である。

また、中山道木曽路は日本風景街道に登録され、ソフト事業での取り組みを進めているが、今後国際的な観光立国を目指す日本の中でも重要な資源である中山道木曽路や、「日本で最も美しい村」連合に加盟する開田高原等の優れた景観と自然環境を生かして、国外(特に欧州等)からの集客を進めるためにはより一層美しい道路周辺環境の整備が重要であり、日本風景街道の中でも重点地域を定め、標識の小型化や電線類の地中化等景観づくりの取り組みを進める必要がある。

②ー1 地域の現状と抱える課題

長野県 木曽町

○現状 木曽町は、平成 17 年 11 月 1 日に 4 町村（木曽福島町・日義村・開田村・三岳村）が合併して誕生した町であり、木曽町建設計画及び第 1 次総合計画に基づいてまちづくりを進めている。 町面積 4 7 6 平方キロの約 9 5 % は山林等であり、木曽福島の中心市街地を中心に木曽川やその支流の溪谷沿いに集落が点在する地形となっており、張り巡らされた道路網と自家用車、公共交通機関により住民生活が維持されている。 木曽御嶽と木曽駒ヶ岳に挟まれ雄大な自然環境に恵まれるとともに、歴史ある中山道の街道として、また木曽ヒノキに代表される木材産業に支えられて発展してきた地域であったが、木材産業等の地場産業が衰退するとともに過疎化と高齢化も進行し、現在 3 4 % 程の高齢化率も 10 年後には 3 8 % 以上になることが予想され、農地の遊休化や手入れされない荒廃林地の増加など、地域活力の減退による問題が発生している。	○課題 過疎と高齢化に歯止めをかけ、若年層の流出を防止するため、木曽地域特有の地域資源（農林産物・自然環境・伝統工芸・観光資源等）を活用し、加工や情報発信を組み合わせることで他地域と差別化することの可能な産業の育成が課題となっている。 また、I ターン等都市部からの移住を推進と交流人口の拡大により、地域の活力を維持するため、空き家の活用等による支援や積極的な情報発信、さらには地域の重要な産業となっている観光と、雄大な自然環境や農林業等を組み合わせ、グリーンツーリズム・エコツーリズムを推進することも課題となっている。 安心して住み続けられる地域であるためには、地域医療の中核である県立木曽病院を中心とした医療体制の維持・向上と子育て支援策の充実・公共交通の維持充実など、住民に密着した生活条件の改善が必要である。
---	--

②－２ 地域の目指すべき将来像

長野県 木曽町

木曽町は、『日本のふるさと・豊かな水と緑あふるる故郷、木曽』を総合計画における将来像として定めており、豊かな自然環境の中で、歴史や伝統文化を大切にしながら、誇りを持って暮らすことのできる地域を目指している。

さらに木曽町のあるべき姿、未来に残すべき姿として「～交流で輝く、『夢の回廊』～」と表現し、新町としての一体感の醸成や新しいまちづくりの目指す方向性を現している。「回廊」は、「回遊できる廊下」の意味であり、当町の各地域が清流に沿う道のネットワークにより結びついているという地形的な特性を現している。「夢の回廊」と銘打ち、その回廊を巡る人々が、美しい自然や優れた文化、活力ある産業に「夢」を感じることができるふるさとづくりをめざしていこうという願いを込めている。

また、高齢者・障害者・子どもたちなどすべての住民が安心・安全に生活できるよう、福祉や健康、防災・防犯のネットワークが築かれる「回廊」をも意味し、国道を中心とした道路交通網や、光ファイバー網の活用など高度な情報ネットワークを形成することにより、都市住民との交流が活発となり、地場産業を生かした経済活動の還流が生まれる「回廊」を目指している。

豊かな森林資源と歴史・自然環境に恵まれた木曽町として、地域の産業を育成するとともに、人と経済の循環を地域内から都市部との広域循環へ拡大し、将来に亘って住み続けることができる地域づくりが目標となる。

③道路施策の重点事項(代表事例、期待する効果や評価等)

○重点事項	○代表事例	○期待する効果や評価等	○その他
・良好な景観の形成	木曽地域全体を中仙道木曽路として風景的な整備を進め、ビューポイント整備や電線類の地中化、屋外広告物の規制等を複合的に進める。	伝統的な風景や歴史資源に一層付加価値を生み、多くの観光交流を生み出すことが期待できる。	
・総合的な交通安全対策および危機管理の強化	国道19号迂回ルート(七笑橋等)整備	国道迂回ルート整備により、交通事故等による通行止めが多発する国道19号を生活道路(通院や通学等)としている住民の交通を確保する。 また、過疎地において高齢化しながらも交通手段として自家用車を利用せざるを得ない高齢ドライバーの生活道路として機能を持つことで、大型車との交通を分けることで重大事故発生のリスクから住民を保護することができる	
・少子高齢化に対応した子育て環境・バリアフリー社会の形成	中心市街地等における歩道の整備	子ども・高齢者の歩行に配慮した歩道を整備するとともに、交通安全施設により自動車と歩行者(車椅子等)を分離し安心して歩くことの出来る中心市街地を形成することができる。	